

しちがつなの か たなばた
7月7日 七夕

いつもは少し寂しい感じがする商店街ですが、今日はぜひぶんとにぎやかです。

アーケードはいろいろな飾りで飾られて、いくつかのお店の前には笹が立てられています。笹の枝には赤や黄色、青などいろいろな色の短冊が糸でつるされています。そう、今日は7月7日、七夕の日です。星のお祭りです。一年に一度、天の川の両側に離された織姫という女性と彦星という男性が会える日です。私たちは、この二人の幸せな再会を祝いながら、自分たちの叶えたい願い事を紙に書いて、笹の枝につるします。この商店街では、訪れた買い物客が自由に願い事を書いて、笹の枝につるすことができるように、テーブルを用意して、その上に短冊とペンが置かれています。今、そのテーブルの前に一人の男の人が立っています。会社帰りのサラリーマンのようです。



珍しく仕事が早く終わったタカシは、自宅近くの商店街を歩いていた。うちに帰って料理するのはめんどくさい。ここで軽く晩御飯でも食べていこうか。

そんなことを考えながら、ふと周りを見回したとき、初めて今日は七夕かときがついた。

「七夕^{たなばた}かあ、なつかしいなあ。そういえば、最後^{さいご}に七夕^{たなばた}の飾り付け^{かざりつけ}を見たのはいつだろう。ずいぶん前^{まえ}だったかもしれない。少なくとも、社会人^{しゃかいじん}になってからは一回^{いっかい}も見た記憶^{きおく}がないな」

タカシが社会人^{しゃかいじん}になってもう3年^{ねん}がたつ。1年目^{ねんめ}は仕事^{しごと}に慣れる^なのに必死^{ひっし}。2年目^{ねんめ}は仕事^{しごと}の量^{りょう}が増えて、3年目^{ねんめ}になると後輩^{こうはい}の面倒^{めんどう}まで見る^みことになった。この目まぐるしい3年^{ねん}の間^{あいだ}、タカシが定時^{ていじ}の午後^{ごご}6時^じまでに仕事^{しごと}を終えた^お日は一日^{いちにち}もなかった。

「俺^{おれ}が最後^{さいご}にした願^{ねが}い事^{ごと}ってなんだっただろう。思い出^{おも}せないな。バスケットボール^{だいがく}がうまくなりますように、だっただかな。それとも、大学^{ごうかく}に合格^{ごうかく}できますように、だっただかな。俺^{おれ}がしたい^{おれ}こと、なんだっただけ」

目の前^めにはテーブル。テーブルの前^{まえ}には短冊^{たんざく}とペン。願^{ねが}い事^{ごと}を書^かいて、笹^{ささ}の枝^{えだ}につるせてことか。おもしろそうだな。俺^{おれ}も書^かいてみよう。ええと、何^{なに}を書^かうかな。願^{ねが}い事^{ごと}、願^{ねが}い事^{ごと}。俺^{おれ}の今^{いま}の願^{ねが}い事^{ごと}。俺^{おれ}が今^{いま}したい^{かな}こと、叶^{かな}えたいこと。手^てに持^もったペン^{ペン}をくるくるとまわしながら、タカシは考^{かんが}える。



その会社^{かいしゃ}帰^{がえ}りのサラリーマン^{サラリーマン}はテーブルの前^{まえ}でずいぶん考^{かんが}えこんでいるようです。願^{ねが}い事^{ごと}を書^かくのは、そんなに難^{むずか}しいことなのでしょう。

今日^{きょう}の商店街^{しょうてんがい}はいつもより人^{ひと}が多く、にぎやかです。通り^{とお}には多く^{おほく}の人^{ひと}が歩^{ある}いています。その中^{なか}の一人^{ひとり}が、テーブルの前^{まえ}で立ち止^{たど}まりました。右^{みぎ}手に買^かい物^{もの}袋^{ぶくろ}を持^もって、左^{ひだり}の肩^{かた}にはショルダーバッグ^さを下^さげています。スーツ^{スーツ}を着^きた、

かいしゃがえ おんな ひと
会社帰りの女の人です。



きょう ぜったい の ころ なか つよ おも
今日は絶対にビールを飲むぞ、とカナコは心の中で強く思った。だって、こ
いっしゅうかん がんば どりょう ふたり びょうき やす
の一週間、わたし頑張ったもん。同僚が二人も病気で休んじゃったから、も
うずっと残業。死ぬかと思ったわ。でも、それも今日で終わり。同僚も今日か
ら しゅっきん あした ふつう はたら ざんぎょう かいほう
出勤してくれたから、明日からは普通に働ける。やっと残業から解放され
るんだ、やった！

すこ きぶん た もの
カナコは少しウキウキした気分でビールとつまみになりそうな食べ物をスー
パーで買った。いつものように しょうてんがい ぬ す かいと
商店街を抜けて、住んでいるアパートに帰る途
ちゅう き つく たなばた かざ ひつけ み きょう
中だった。気が付くと七夕の飾りつけ。スマホの日付を見てはじめて、今日が
7月7日だったことに気がついた。

「そっかー、もう7月なのね。時間がたつのははやいなあ。 さくら ち
桜が散ったかと
おも がつ たなばた なつ ちい
思ったらもう7月なんだもん。でも、七夕って、なんか懐かしい。小さいころ、
とう かあ いっしょ たなばた まつ い ゆかた き
お父さんとお母さんと一緒に七夕のお祭りに行ったなー。あのときは浴衣を着
せてもらって、そと で なんだかうれしかったな。 りょうしん て
両親と手をつない
かえ よみち おな みち ちが み こわ
で帰った夜道。いつもと同じ道なのにぜんぜん違うところに見えた。ちょっと怖
かったけど、お父さんとお母さんが手をつないでくれたら、なんだか安心できた
な」

たなばた かざ み あ なつか きも むね
七夕の飾りを見上げながら、カナコは懐かしい気持ちで胸がいっぱいになっ
た。

「私が最後にした願い事ってなんだっただろう。思い出せないな。習字がうまくになりますように、だったかな。それとも、外国に行けますように、だったかな。私がしたいこと、なんだったっけ」

目の前にはテーブル。テーブルの前には短冊とペン。願い事を書いて、笹の枝につるせてことか。おもしろそうだな。私も書いてみよう。ええと、何を書こうかな。願い事、願い事。私の今の願い事。私が今したいこと、叶えたいこと。

手に持ったペンをくるくるとまわしながら、カナコは考える。



テーブルの両端にそれぞれ、男の人と女の人が、ペンを片手に持って悩んでいます。願い事を書くのはそんなに難しいことなのでしょうか。

男の人が女の人をチラッと見ました。女の人も男の人をチラッと見ました。目が合った二人は、気まずそうに目を伏せます。最初に声をかけたのは女の人でした。

「なんか、この年になると、願い事って簡単に出てきませんね。」

男の人はちょっと戸惑いながらもあわてて答えます。

「あ、そうですね。俺もずっと考えているんですけど、なかなか思いつかなくて。」

「私もそうです！ 小さいころはもっといろんな願い事が簡単に出てきたとおもうんですけど。これって、年のせいかな？」

おんな ひと かる わら おとこ ひと わら
女の人は軽く笑いました。男の人にも笑いました。

「なんか、七夕って懐かしいですね。よく祭りに行ったな、子どものころ」

「そうそう、私は毎年お母さんに浴衣を着せてもらったんです。かわいかった
んですよ、そのころは」

「いや、今だって・・・」

なぜだか、男の人の顔が赤くなりました。女の人も恥ずかしそうです。

その日、二人がどんな願い事を書いたのか、わかりません。でも、その時の二人
が全然思いつかなかった願い事は、どうやらその後叶ったようです。

(2307字)

(2022.8 Written by Yuki MORI)



この作品はクリエイティブ・コモンズ 表示 - 非営利 - 継承 4.0 国際 ライセンスの下に提供されています。この
作品を利用する場合は、「たどくのひろば」を出典として示してください。

例) 出典: 「たどくのひろば」 (<https://tadoku.info>)

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License. When you use
this work, please indicate the source as in the example above.